

# 対人葛藤の原因の所在と相手の対処方略が 受け手の反応に及ぼす影響

栗 林 克 匡

## 対人葛藤の原因の所在と相手の対処方略が 受け手の反応に及ぼす影響

栗林 克 匡

Yoshimasa KURIBAYASHI

### 目次

- I. 問題
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察
- 引用文献

### [Abstract]

**The Effects of Locus of Control and Opponent's Resolution Strategy on the Reactions of the Receiver in Interpersonal Conflicts**

This study examined the effects of locus of control and opponent's resolution strategy on the reactions of the receiver in interpersonal conflicts. A total of 185 university students imagined a given interpersonal conflict situation. In each situation, the locus of the cause of the conflict (themselves or their opponent) and opponent's resolution strategy (integrating, dominating, obliging, or avoiding) were manipulated respectively. Participants were asked about (a) their own resolution strategy, (b) their future relationship, and (c) their feelings toward the opponent. The main results were as follows. (1) Participants generally chose an integrating strategy to whichever strategy the opponent chose. (2) In the case of a situation in which the opponent was the cause of the conflict and chose an avoiding strategy, participants tended to select a dominating strategy. (3) When participants themselves were the cause of the conflict, they preferred to choose an avoiding strategy or an obliging strategy.

### I. 問 題

対人葛藤場面においては、様々な対処方略を取り得る。対人葛藤は、人々の間の利害や意見の対立・不一致のことで、「個人の目標が他者の行動によって妨害された状態」と定義される(大淵, 1999)。対人葛藤対処方略は、「対人葛藤状況において、葛藤解決を目的とし方略行使者が葛藤相手に対して何らかの影響力を行使しようとした行動」である(加藤, 2003)。葛藤対処方略については、Thomas (1976)の「対決 (competing)」「協力 (collaborating)」「妥協 (compromising)」「回避 (avoiding)」「譲渡 (accomodat-

ing)」の5種類の対処方略の提案, Falbo & Peplau (1980)の2次元モデル(直接的か間接的か、一方向的か双方向的か)の提案などが挙げられるが、本研究ではRahim (1983)の二重関心モデルに注目する。このモデルでは、対人葛藤対処方略を自己への関心と他者への関心の2次元でとらえている。自己への関心のみが高い「支配方略 (dominating)」は相手の利益を犠牲にしてでも自分の要求や意見を主張して通そうとする方略、他者への関心のみが高い「服従方略 (obliging)」は相手の要求や意見に従う方略、いずれの関心も高い「統合方略 (integrating)」は自分と相手の両者が受け入れられるように協調して

キーワード：対人葛藤、原因の所在、葛藤対処方略

Key words: Interpersonal Conflict, Locus of Control, Conflict Resolution Strategy

問題解決しようとする方略, いずれの関心も低い「回避方略 (avoiding)」は相手との直接的な交渉を避けようとする方略である。またそれら方略の中庸に「妥協 (compromising)」を挙げている。このRahimのモデルに基づき個人が対人葛藤場面で取り得る対処方略を測定する尺度として, 浅原 (2000) は日本語版 Rahim Organizational Conflict Inventory - II (ROCI-II) を作成している。因子分析の結果, 4つの因子が抽出され, その項目内容から「問題解決」「回避」「服従」「主張」とそれぞれ命名されている。本研究では, この4方略を採用することとする。Rahimの「妥協」方略については, 浅原 (2000) の研究で独立した因子として抽出されなかったことと, 中庸な方略ゆえに場面を作成するにあたり設定が曖昧になる可能性があることから除外することとした。

対人葛藤解決方略の選択に影響を及ぼす要因の例として以下のようなものがある。①個人差の要因として, Big Five (加藤, 2003), 甘え表出 (大迫・高橋, 1994), 葛藤に対する認知スタイル (藤森, 1989) などがある。②相手との関係に関する要因として, 相手の種類 (藤森, 1989; 深田・山根, 2003), 親密さや地位関係 (Drory & Ritov, 1997; Rahim, 1983), 友人関係の動機づけ (本田, 2012) などがある。③葛藤解決目標の要因として, 多目標理論 (大淵・福島, 1997; Ohbuchi & Tedeschi, 1997), 関係目標 (吉田・中津川, 2013) に注目したものがある。④葛藤使用時の文脈 (1回目最善手・2回目次善策) を要因として取り上げた深田・山根 (2003) の研究がある。⑤文化差の要因として, 大淵・菅原・Tyler-Lind (1995) の日米比較の研究などが挙げられる。

このように様々な要因についての検討が行われているが, 本研究では, “対人葛藤の相手の対処方略”を要因として取り上げることとする。対人葛藤場面で, 相手が問題にどの

ように対処するのかを窺った後に, 自身の対処方略のあり方を決定するということが多々あるであろう。この要因を扱った先行研究として, 大淵・福島 (1995) と栗林 (2001) の研究を紹介する。まず大淵・福島 (1995) の研究では, 自分と他者の葛藤に対する反応の互酬性と葛藤解決について検討している。最近の対人葛藤経験を想起させ, そのときの自他がとった対処方略や葛藤解決度を尋ねた。その結果, 「協調」「回避」「第三者介入」方略について互酬性が見られ, 当事者の一方がこれらの方略を用いると, 他方も同じタイプの方略で応じる傾向があった。「対決」方略については互酬性が見られず, 一方が対立方略をとると, 他方は協調か回避の方略をとるようであった。解決度については自他ともに協調方略をとった場合, 解決をもたらすことが多く, 相手が対決的であることは解決には至りにくいことが明らかになった。満足度については相手に対決的でも第三者の介入によって満足度の高い結果が得られることが示されたが, 相手が第三者を介入させることは不満な結果をもたらしやすいということが明らかにされている。ただし彼らの研究では, 相手の対処方略と自分の対処方略のどちらが先行するかについては明らかではない。そして栗林 (2001) は, 大淵・小嶋 (1998) を参考に葛藤原因の分類 (個人的攻撃・敵意, 活動の妨害, 関係のルール違反, 意見・慣習の不一致) を要因として取り上げ, 相手が取る対処方略の要因を絡めて, 相手への印象と自身が取る対人方略への影響について検討している。自分がとる対処方略について, 葛藤原因の分類の主効果が有意であった。「関係のルール違反」「活動の妨害」の原因時に, “怒りを示す”という対処方略が採用されやすく, 逆に“機嫌をとる”という方略は採用されにくかった。“誰かに助けを求める”という方略は, 「個人的攻撃・軽視」の方が「関係のルール違反」の原因の時よりも採用されやすい。

“話し合う”方略は、「活動の妨害」が原因時には採用されにくかった。相手の対処方略の要因の主効果が見られたのは“話し合う”のみで、相手が“話し合う”という方略をとってきた時には、自分も“話し合う”という方略で応じていた。葛藤の原因の分類と相手の対処方略との交互作用は特に見られなかった。ただしこの研究では、葛藤の原因の所在が相手の友人側に固定して設定されていることが、大淵・福島（1995）の互酬性のパターンとは異なった結果をもたらした可能性がある。

対人葛藤場面において、そもそもの葛藤の原因の所在が自分にある場合と他者にある場合とでは、相手が取る対処方略の持つ意味合いが異なってくることが予想される。例えば、相手に明らかな過失がある時に、相手が強く主張して自分に迫る場合と、こちらの言い分を飲もうとしてくる場合とでは、受け手がその後に取り得る対処も違ってくるであろう。

そこで本研究では、対人葛藤の原因の所在（相手・自分）と、葛藤の相手が取る対人葛藤対処方略（主張・服従・問題解決・回避の4種）を実験的に操作した上で、受け手の対処方略の選択に及ぼす影響について検討することを目的とする。なお方略の選択に付随する受け手の反応として、葛藤相手に対する感情と今後の関係性の認知についても合わせて検討する。

## Ⅱ. 方法

参加者：大学生185名（男性63名、女性122名）。平均年齢は19.52歳（SD=1.31）であった。なお調査は2014年9～10月に実施した。

場面の設定：本田（2012）を参考に、仲の良い友人と旅行に行く計画を立て、行先を決定する時の対人葛藤場面とした。その場面で、葛藤の原因の所在（相手にある、自分にある）×相手の対人葛藤対処方略（主張方略、服従方略、問題解決方略、回避方略）の条件操作を行った8つの場面を作成し、参加者毎にいずれか1つの場面を呈示した（場面例は図1参照）。原因の所在の操作は、図1の下線部の「Aさん」と「あなた」の立場を入れ替えることで行った。また対処方略の操作として、図1の波線部について、服従方略は「Aさんは自分の希望を取り下げて、あなたのプランを受け入れました。」とし、問題解決方略は「Aさんはあなたが立てたプランとAさんが行きたいと思っている場所を踏まえて、お互い納得のいく結論となるように話し合おうとしています。」とし、回避方略は「Aさんは『じゃあいい』といってその場から立ち去りました。」とそれぞれ変更した。

質問紙の構成：①参加者の基本属性（年齢、性別、所属）の他、以下の項目について回答させた。②原因の所在の操作チェック：場面

あなたは、今度の休みに仲の良い友人Aさんと2人で旅行をすることになり、行先や交通手段、宿泊場所などの詳細を決めるために、打ち合わせをすることになりました。しかし、Aさんは「どこでもいい」「あなたに任せる」というばかりで、具体的な案をあげませんでした。そこで、あなたは一人で行先や宿泊場所などについて調べ、交通手段を含めて、ルートを決め、詳細な計画を立てました。あなたが最後に宿泊場所に予約をしようとしたときに、Aさんは「どうしても〇〇に行きたい」と言いました。しかし、Aさんが行きたい場所は、あなたが計画した場所とは別の方向であり、Aさんの希望にこたえるためには計画を立て直さなければなりません。2人の間には険悪な雰囲気は漂いました。

そこで、Aさんはなんと少しでも自分のプランを通そうとして、意見を強く主張してきました。

図1 呈示場面の例（相手に葛藤の原因があり、相手が主張方略をとってきた場合）

表 1 日本語版 ROCI-II の項目 (浅原, 2000による)

問題解決方略	
5	相手と協力し, 両方の期待を満たすような解決策を見出そうとする
23	お互いにとって納得のいく結論となるように, 相手と協力する
4	共通の結論に達するように, 自分の考えと相手の考えを統合しようとする
15	妥協にいたるよう相手と話し合う
1	両方が受け入れられるような解決策を見出すために, 問題を吟味する
7	袋小路を抜け出すために, 折衷案を見出そうとする
28	問題を正しく理解するために相手と協力する
12	一緒に問題を解決するために, お互いの意図を正確に伝えあう
20	「ギブアンドテイク」という形で妥協する
14	行き詰まり状態を打開するために, 間を取ることを提案する
22	一番良い方法で問題を解決できるように, お互いの考えていることを全て出し合う
回避方略	
27	相手と不愉快なやりとりをするのは避けようとする
6	相手と自分との違いを表立って議論するのを避ける
26	面倒な思いをしたくないので, 相手との行き違いは自分の中におさめておこうとする
3	その場での対立を避け, 相手との行き違いを自分の中におさめておくようにする
16	相手との食い違いには目をつぶろうとする
17	相手と会うのを避ける
服従方略	
11	こちらが折れて相手の気に入るようにする
10	相手の希望にあわせるようにする
24	相手の期待どおりにする
13	自分が相手に譲歩する
2	相手の要求を満たすようにする
19	相手の提案を受け入れるようにする
主張方略	
9	自分の気に入るような結論になるように強制的にもっていく
8	自分の考えを受け入れさせようとする
21	自分の立場を強く主張する
25	勝つか負けるかのような状況では, 自分が勝つように強く出る
18	自分の気に入るような結果になるように, 自分に都合の良い理由をあげる

の葛藤の原因が相手にあるか自分にあるかについて選択させた。③自分の対処方略：Aさんに対する行動として浅原（2000）が作成した ROCI-II 日本語版尺度の28項目（問題解決方略11項目、回避方略6項目、服従方略6項目、主張方略5項目）に、「1全く実行しようと思わない～5強く実行しようと思う」の5段階で回答させた（表1参照）。④今後の関係性の認知：Aさんとの関係が今後どうなるかについて、「1わるくなる～4変化なし～7よくなる」の7段階で回答させた。⑤相手に対する受け手の感情：Aさんに対する感情として、怒り、安心、悲しさ、不満、大切にされている、罪悪感、寂しさ、わずらわしさ、ありがたさ、恐怖、同情、失望、あ

きらめの13項目について、「1全く感じなかった～5非常に感じた」の5段階で回答させた。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 操作チェック

まず原因の所在の操作チェックを行い、条件の操作に合致しない参加者10名については、以下の分析から除外した。

#### 2. 相手に対する感情の因子分析

相手に対する受け手の感情13項目について主因子法プロマックス回転による因子分析を行ったところ、2因子が抽出された（表2参照）。第1因子は、「ありがたさ」「罪悪感」

表2 相手に対する受け手の感情の因子分析結果  
(主因子法プロマックス回転)

	I	II
ありがたさ	.924	.040
罪悪感	.854	.323
安心	.785	.056
大切にされている	.744	.121
怒り	-.743	.178
不満	-.595	.288
失望	-.563	.420
同情	.536	.204
寂しさ	.402	.823
悲しさ	-.073	.625
恐怖	.255	.595
わずらわしさ	-.192	.546
あきらめ	-.436	.494
固有値	5.221	1.812
累積寄与率 (%)	40.160	54.098
因子間相関		
I. 謝意 ( $\alpha=.90$ )		-.413
II. やりきれなさ ( $\alpha=.74$ )		

など8項目から構成されており「謝意」感情因子と命名した。信頼性係数は $\alpha=.90$ であった。第2因子は、「寂しさ」「悲しさ」など5項目から構成されており、「やりきれなさ」感情因子と命名した。信頼性係数は $\alpha=.74$ であった。因子負荷量.450以上の項目を各因子を構成する項目とみなして加算後、項目数で除した値を用いた。

### 3. 対人葛藤の原因の所在と相手の対処方略の影響

相手に対する感情、自身の対処方略の選択および今後の関係性を従属変数とし、葛藤の原因の所在(自分・相手)×相手の対処方略(主張・服従・問題解決・回避)の2要因分散分析を行った(表3参照)。なお、自身の対処方略得点は各因子を構成する項目を加算後、項目数で除した値を用いた。

受け手の「謝意」感情は、相手の対人葛藤対処方略の主効果が有意であった( $F(3,163)=6.83, p<.001$ )。Tukeyの多重比較の結果、相手が服従方略(3.17)のときは、主張方略(2.81)・問題解決方略(2.79)・回避方略(2.61)のときよりも感じていた。また葛藤の原因の所在の主効果も有意で( $F(1,163)=320.12, p<.001$ )、葛藤の原因が自分(3.62)の時に、相手(2.02)の時より謝意感情を感じていた。「やりきれなさ」感情については、葛藤の原因の所在の主効果が有意で( $F(1,163)=10.64, p<.01$ )、葛藤の原因が相手(3.05)の時に、自分(2.66)の時よりやりきれないと感じていた。

受け手自身の「主張方略」は、相手の対人葛藤対処方略の主効果が有意であった( $F(3,162)=3.21, p<.05$ )。Tukeyの多重

表3 相手の葛藤対処方略×葛藤の原因の所在別の平均値・SD・F値

	主張(相手)		服従(相手)		問題解決(相手)		回避(相手)		相手の対処方略	原因の所在	交互作用
	相手	自分	相手	自分	相手	自分	相手	自分			
謝意感情	2.00 (0.56)	3.54 (0.62)	2.32 (0.42)	3.96 (0.57)	1.83 (0.49)	3.71 (0.63)	1.91 (0.61)	3.26 (0.70)	6.83***	320.12***	1.52
やりきれなさ感情	3.09 (0.92)	2.55 (0.75)	3.03 (0.49)	2.43 (0.78)	3.05 (1.00)	2.54 (0.93)	3.05 (0.66)	3.09 (0.76)	1.48	10.64**	1.48
主張方略	2.17 (0.70)	1.82 (0.54)	2.38 (0.59)	1.80 (0.58)	2.56 (0.89)	2.16 (0.89)	2.67 (0.79)	2.15 (0.85)	3.21*	16.51***	0.21
服従方略	3.03 (0.89)	3.69 (0.55)	3.04 (0.72)	3.89 (0.60)	2.95 (0.94)	3.51 (0.58)	2.97 (0.98)	3.67 (0.82)	0.68	33.85***	0.27
問題解決方略	3.63 (0.80)	3.65 (0.47)	3.68 (0.37)	3.73 (0.68)	3.37 (0.74)	3.69 (0.48)	3.43 (1.00)	3.58 (0.68)	0.82	1.60	0.43
回避方略	2.89 (0.86)	3.23 (0.63)	2.92 (0.66)	3.37 (0.58)	2.95 (0.79)	3.08 (0.61)	2.89 (0.96)	3.27 (0.61)	0.24	8.51**	0.39
今後の関係性	3.30 (0.92)	3.45 (1.30)	3.33 (0.80)	3.00 (0.85)	3.10 (1.00)	4.23 (1.48)	3.27 (1.35)	3.21 (1.59)	1.43	1.49	3.05*

※感情は5段階で高得点ほど「感じた」、自身の対処方略は5段階で高得点ほど「実行しようと思う」、今後の関係性は7段階で高得点ほど「よくなる」

※ \* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

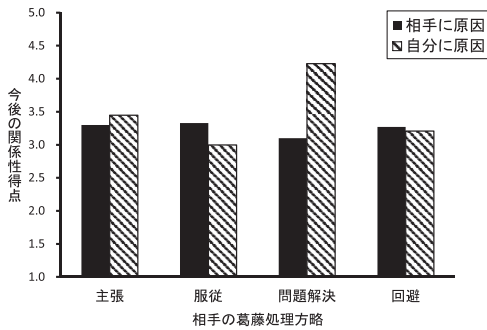


図 2 対人葛藤の原因の所在及び相手の葛藤対処方略が今後の関係性に及ぼす影響

比較の結果、相手が主張方略 (1.99) のときよりも、回避方略 (2.41) のときに受け手は主張方略を選択していた。また葛藤の原因の所在の主効果も有意で ( $F(1, 162) = 16.51, p < .001$ )、葛藤の原因が相手 (2.45) の時に、自分 (1.98) の時よりも主張方略を選択していた。また「服従方略」と「回避方略」で原因の所在の主効果が有意であった ( $F(1, 162) = 33.85, p < .001$ ;  $F(1, 162) = 8.51, p < .01$ )。葛藤の原因が自分 (3.69) の時は相手 (3.00) の時よりも受け手は服従方略を選択しており、また原因が自分 (3.24) の時は相手 (2.91) の時よりも受け手は回避方略を選択していた。「問題解決方略」では主効果及び交互作用は有意ではなかった。

「今後の関係性」は、相手の対人葛藤対処方略×原因の所在の交互作用が有意であった ( $F(3, 167) = 3.05, p < .05$ )。原因が自分にある場合、相手が服従方略 (3.00) よりも問題解決方略 (4.23) の方が受け手は今後の関係の得点が高かった。また、相手の対人葛藤対処方略が問題解決方略であるとき、相手

原因 (3.10) よりも、自分原因 (4.23) の方が今後の関係の得点が高かった (図 2 参照)。

#### 4. 相手に対する感情と受け手の対処方略との関係

相手に対する受け手の感情と対処方略との関係について、ピアソンの積率相関係数を算出した (表 4 参照)。謝意感情は、服従 ( $r = .50, p < .001$ )、問題解決 ( $r = .17, p < .05$ )、回避 ( $r = .22, p < .01$ ) の対処方略と有意な正の相関がみられたが、主張 ( $r = -.42, p < .001$ ) とは負の相関がみられた。やりきれなさ感情は、主張 ( $r = .31, p < .001$ ) と有意な正の相関がみられたが、服従 ( $r = -.22, p < .01$ ) とは負の相関がみられた。

#### IV. 考 察

本研究では、対人葛藤の原因の所在と、葛藤の相手が取る対人葛藤対処方略が、受け手の対処方略の選択に及ぼす影響について検討した。全体としてみると、相手がどの方略をとってきても受け手自身は問題解決方略をとろうとしていた。問題解決方略を最もよく使用するという結果は、深田・山根 (2003) の研究でも同様にみられている。問題解決方略は対立者との間に良い関係を維持したい、理解し合いたいという気持ちが強いほど選択される (大淵・福島, 1997) ので、大学生にとって友人関係の維持が重要であることが窺える。

また、相手が悪いにもかかわらず回避的な行動を示してきたときには、受け手自身は主張の方略を選択することで、問題を曖昧にしないという積極的姿勢となるが、自分が悪い

表 4 受け手の感情と対処方略との相関

	主張(自分)	服従(自分)	問題解決(自分)	回避(自分)
謝意	-.42***	.50***	.17*	.22**
やりきれなさ	.31***	-.22**	-.07	.01

※ \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

場合には自身は回避方略や服従方略を選択するという消極的な姿勢となってしまうという対称性が現れたのは興味深い。受け手が主張的方略を選択する際には、やりきれない感情や怒りや不満といった感情（謝意とは逆の感情）が生じており（表4）、それら感情を解消すべく積極的に自分の主張を行おうするのであろう。受け手が服従方略を選択する際は、葛藤の原因が自分自身にある場合に多く、相手に対してありがたいという謝意を強く感じ、やりきれなさは感じていない状態であることが窺える（表4）。相手の意向を受け入れることで一種の償いの意味を持つと考えられる。受け手が回避方略を選択する際は、やや複雑な思考が働いているかもしれない。今回の結果は、葛藤の原因が自分自身にある時に、相手に対して謝意を感じつつも、回避を選択しているというパターンが窺える。安易に自身が服従方略を選択してしまうと、相手に対する償いにはなるかもしれないが、自分の要望が叶えられなくなってしまう。かといって自分の主張を強めることもできない悩ましい状況であるため、適切な対処が思いつかずに回避するあるいは事を荒立てないために回避するといった選択をしたのかもしれない。

葛藤の原因の所在と相手の対処方略が「今後の関係性」の認知に及ぼす影響として、原因が自分にある場合、相手が服従方略よりも問題解決方略の方が受け手は今後の関係の得点が高いという交互作用がみられた（図2）。大淵・福島（1995）の結果でも問題解決方略が解決として満足な結果をもたらすことが示されており、受け手にとっても今後の関係を肯定的に捉えることができると思われる。ただし今回、問題解決方略の得点が高いといっても中点4.0点（＝関係に変化なし）付近であり、関係が現状よりもさら良くなるというわけではないようである。またこの交互作用は、受け手の自分の方が悪いのに相手が服従方略取った場合には逆に関係が悪化すること

を予想していることも示している。服従方略は、受け手にとっては自分の意見が全面的に通じ、思い通りになる点で満足感は得られるが、相手は我慢することになる。どちらかが我慢を強いられる関係は（それも相手は悪くない場合はなおさら）、ストレスフルでいつか関係の崩壊へとつながってしまうのではと考えるのかもしれない。

今後の課題として、まず第1に葛藤原因に関する要因をさらに精査する必要がある。今回は葛藤原因の所在（自分か相手か）を要因として取り上げたが、例えば葛藤原因の統制可能性や安定性などを考慮した検討も興味深い。栗林（2001）は葛藤原因の分類（種類）の要因を取り上げているが、今回は「意見の対立」に起因する場面を設定したものであった。その他の原因の分類と原因の所在を掛け合わせた検討も可能であろう。第2に、対処方略の応酬の可能性も考える必要がある。今回は、相手の対処方略を受けて自分がどう対処するかを検討したが、そこからさらに相手が何らかの対処方略を取ってくるかもしれない。双方の葛藤解決に向けての相互作用のプロセスを追跡的に検討することも興味深い。第3に、今回は仮想場面を想定して回答させているため、現実場面での反応は異なる可能性がある。想定では理想的な問題解決を望んでも、実際には回避や服従が選択されやすくなるかもしれない。工夫は必要であるが実験室実験での検討を行うことも望まれる。

#### 【付記】

本研究の実施にあたり、成田美咲さんの協力を得ました。記して感謝いたします。

本研究の一部は、日本グループ・ダイナミックス会第62回大会で発表された。

#### 【引用文献】

浅原知恵（2000）. Rahim Organizational Conflict Inventory-II 日本語版の作成 性格心理学研



- 究, 9(1), 54-55.
- Drory, A. & Ritov, I. (1997). Effects of work experience and opponent's power on conflict management styles. *International Journal of Conflict Management*, 8, 148-161
- Falbo, J. & Peplau, L. A. (1980). Power strategies in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 618-628.
- 藤森立男 (1989). 日常生活にみるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究 社会心理学研究 4(2), 108-116.
- 深田博己・山根弘敬 (2003). 大学生の対人葛藤解決方略に関する研究 広島大学心理学研究, 3, 31-49.
- 本田周二 (2012). 友人関係における動機づけが対人葛藤時の対処方略に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 21(2), 152-163.
- 加藤 司 (2003). 大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ、精神的健康との関連性について 社会心理学研究, 18(2), 78-88.
- 栗林克匡 (2001). 対人葛藤の原因と対処方略の影響に関する研究 日本グループ・ダイナミックス学会第49回大会発表論文集, 202-203.
- 大淵憲一 (1999). 対人葛藤 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 有斐閣
- 大淵憲一・福島 治 (1995). 対人葛藤における解決方略の互酬性と認知的バイアス 日本社会心理学会第36回大会発表論文集, 394-395.
- 大淵憲一・福島 治 (1997). 葛藤解決における多目標：その規定因と方略選択に対する効果 心理学研究, 68(3), 155-162.
- 大淵憲一・小嶋かおり (1998). 対人葛藤の原因と対人関係：比較文化的分析 文化 (東北大学文学会), 61(3・4), 66-80.
- 大淵憲一・菅原郁夫・Tyler, T. R.・Lind, E. A. (1995). 葛藤における多目標と解決方略の比較文化的研究：同文化葛藤と異文化葛藤 東北大学文学部研究年報, 45, 1-16.
- Ohbuchi, K., & Tedeschi, J. T. (1997). Multiple goals and tactical behavior in social conflicts. *Journal of Applied Social Psychology*, 27, 2177-2199.
- 大迫弘江・高橋超 (1994). 対人葛藤事態における対人感情及び葛藤処理方略に及ぼす「甘え」の影響 実験社会心理学研究, 34(1), 44-57.
- Rahim, M. A. (1983). A measure of styles of handling interpersonal conflict. *Academy of Management Journal*, 26, 368-376.
- Thomas, K. W. (1976). Conflict and Conflict Management. In M. D. Dunnette (Ed.) *Handbook of industrial and organizational Psychology*, Chicago: Rand-McNally, pp. 889-935.
- 吉田琢哉・中津川智美 (2013). 対人葛藤処理方略の選択に対する関係目標の影響—接近-回避の軸に基づく検討— 実験社会心理学研究, 53(1), 30-37.